



<論説>スペインの市民階級：セビリヤの場合

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 孝夫 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00002111 |

スペインの市民階級

—セビリヤの場合—

西 村 孝 夫

一 問題のありか

通常「市民階級」⁽¹⁾が正常な発達をとげたのは、いわゆる「市民革命」を経過して「市民社会」を形成した諸国、とくにイギリスやフランスにおいてであった。これに対して南欧スペインの場合、「市民階級」は発生しなかったかどうか。発生はしたが、もし正常な発達をとげなかったとすれば、それはどういう理由によるのか。あるいはまた、もし全く発生しなかったとすれば、それはなぜなのか。このような「市民階級」の具体的な姿をスペインについて考察するのが、本稿の目的である。

だがその考察の前に、ぜひはっきりさせておかねばならぬのは「市民階級」といってもこれに少くとも二つのタイプを含むという論点である。一口に「市民階級」といっても、通例人々は、大商人、金融業者から小手工業者、小親方、小商人までを含む雑然とした一群の階層を指していることが多いし、さらに広くなれば、およそ都市に住む諸社会層、すなわち自由業、貴族、日雇、芸人なども含めて市民という場合もある。この後者は除外してもな、お雑多な階層を一律に市民というのは概念の混乱を招き易いので、ここで「大商人層」あるいは「商業

ブルジョア」と「小市民層」あるいは「産業ブルジョア」という二つのタイプに類別するのが便利である。

というのは、明かに同じく「市民階級」といっても、都市そのものに「中世都市」と「近代都市」、同じヨーロッパ内でも「北欧都市」と「南欧都市」また広く世界史的に見れば、「ヨーロッパの都市」と「アジア的な都市」との間には、研究史上顕著な区別、特長が明白にされており、そのような諸都市で支配的な力を有する市民にも、文化史上異った役割を果たす階層が是非とも区別されなければならぬ事情が介在している。当面、われわれの本稿でのテーマから見ても、スペインの文化は、同じくヨーロッパ文化の中に含まれるとしても、明らかにイギリスやフランスの文化とは異った特色を有しており、その文化、とくに近世のスペイン文化を担う支配的な市民層のタイプも、おのずからイギリス、フランスの有力な市民層とは異っていることが想定される。結論を先取りしていえば、スペインの近世史において文化の有力な担い手であった市民は、「小市民層」ではなくて「大商人層」あるいは「商業ブルジョア」それも「貴族あるいは騎士化」した商人層といわれる社会層であったと思われるが、それを具体的に例証しつつ、しかもなぜスペインでは「小市民層」が有力な支配的地位に上昇しえなかつたかを考察してみたいと思う。もちろんわれわれの視角は、近世スペイン文化の特色との関連において用意されており、宗教、美術、絵画、政治、経済等々様々の文化領域における諸特色とこの社会層との内的連関が常に問われねばならない。

なお序に一言しておけば、スペイン史は一般に日本ではヨーロッパ史研究の中で、最も立後れた研究分野の一であって、⁽²⁾勢い社会||経済史的研究も著るしく不振である。なぜこのような立後れが見られるのかは充分反省されるべき論点であるけれども、⁽³⁾それは暫く措くとして、日本とスペインとの近世初頭における交渉、とくに宗教的(イエズス会とザヴィエル)、経済的(ルソン貿易と金、銀探究)⁽⁴⁾なそれを考慮すれば、決して等閑に付されて

よい研究分野ではないはずである。それはともかく、右の研究上の立後れが、本稿での考察をも不十分なものとするであろうことは予め断っておかねばならないと思う。

二 セビリヤとその支配的市民—商人

近世のスペインにおける諸都市の隆替、繁栄の歴史を通観する者の眼をとくに打つ顕著な事實は、カディス Cádiz に代って新大陸貿易の独占を十六世紀初めに獲得したセビリヤの擡頭である。それゆえもしスペインの市民階級の代表的な事例を挙げるとすれば、何処よりも先にセビリヤ Sevilla のそれをとるのが至当であろう。もちろんセビリヤ以外に首都マドリードをはじめ、あの「黄金時代」 Siglo de Oro に諸工業を誇ったグラナダ Granada、カスチリヤ、トレーダ Toledo、クエンカ Cuenca、セゴビヤ Segovia、パスクなどを挙げることもあるが、セビリヤをまず第一の屈指の都市と考えることに異論はないであろう。⁽¹⁵⁾

このセビリヤの都市にも様々な身分と人種の間がいた。スペイン人ばかりでなく、ヨーロッパ各国の商人、代理商、アフリカの黒人、モリスコスとよばれる旧回教徒達がいたといわれる。⁽⁶⁾ しかしこのセビリヤの繁栄と富とを一身に掌握した社会層は商人、貿易業者であり、さらに旧・新の貴族層であった。しかし、とりわけ大商人がこの都市民の中の最も実力ある階層であった。「第二番目の驚きは、商人の身寄りをもたぬセビリヤの貴族である」と十六世紀末の一詩人 (Ruiz de Alarcón [1580?—1639]) はうたっている。⁽⁷⁾ 身分上はともかく社会的に経済的に最も勢力ある階層が何であったかをこの語は示している。

コロンブスの新大陸発見によって西インド諸島との貿易が始まったが、スペイン王室はポルトガルの東インド貿易の先例になら⁽⁸⁾って貿易独占を企てようとして、一五〇三年セビリヤに「西インド商館」 Casa de Contratacion

de las Indias^(補1)を設けた。しかしこれは失敗し、結局王室の庇護の下にセビリヤの商人ギルドを主軸とする商人の独占に委ねられることになった。一五二〇年代にはほほその形をととのえるに至った。商館は王室の貿易統制機関に変わり、西インド貿易に従事する商人の間に組合 *consulado* をつくろうとする動きは、ついに一五四三年八月の「西インド貿易商組合」 *Universidad de los Cargadores a las Indias* の成立に結実した。

この組合結成の理由としては西インド商館の司法官 *juces oficiales* の非能率があげられる。すなわち西インド貿易に伴う商人間の諸問題、紛争の裁定を行うこの官吏の仕事は、取引の拡大とともに増加し、仲裁判定の遅滞が起り、ために商人に損害を与えるに至ったというのであるが、しかしもともと前期的商業の本来の性格からして、強力な前期的独占を他の諸都市に対して強化する必要があったからこそ、組合を設立したのである。商館をセビリヤに誘致したのも、セビリヤ商人達の運動によるものであったと思われるが、とくにこれは後に見るように、同じグワダルキビル河 *Guadalquivir* の河口に位置する良港カディスに対抗して行われたのである。⁽⁹⁾

ところで西インド貿易の対象となった輸出入商品は何であったか。セビリヤへの最も重要な輸入品は、スペイン領アメリカに産出する金・銀で、とくに銀は、かの「価格革命」をヨーロッパ各国に波及させた程にその流入は激しかった。この他に「植民地物産」原材料としての蔗糖、煙草、蕪方木、藍、洋紅、皮革などもあったが、銀の圧倒的重要性には及ばない。これらの金、銀は、一五二一年のフェルナンド・コルテスのメキシコ征服〔モンテスマ王国滅亡〕と一五三二年より三六年に至るフランシスコ・ピサロによるペルー、インカ帝国の征服、そして一五四五年ポトシ銀山（ポリビア）、四八年サカテカス銀山（メキシコ）、五八年グワナフート銀山（メキシコ）などの発見、開発、さらに一五五六年バルトロメ・デ・メディナによる水銀アマルガム法の精錬技術の移入によって巨大な生産量に上り、かつそれがセビリヤに奔入したものである。スペイン領新大陸の金・銀年平均産額

(11)
年平均金銀輸入額 (ペソ)

金・銀輸入純量 (グラム)

スペインの市民階級

| | 王室 | 個人 | 計 | 金 | 銀 |
|-----------|----------------|----------------|-----------------|---------------|------------------|
| 1503~1510 | 75, 176. 3 | 211, 756. 2 | 286, 932. 5 | 4, 965, 170 | — |
| 1511~1520 | 114, 690. 5 | 323, 059. 4 | 437, 749. 9 | 9, 153, 220 | — |
| 21~ 30 | 61, 444. 6 | 173, 076. 6 | 234, 521. 2 | 4, 889, 050 | 148, 739 |
| 31~ 40 | 356, 649. 1 | 760, 975. 7 | 1, 117, 624. 9 | 14, 466, 360 | 86, 193, 876 |
| 41~ 50 | 470, 092. 0 | 1, 620, 451. 2 | 2, 092, 543. 2 | 24, 957, 130 | 177, 573, 164 |
| 51~ 60 | 1, 039, 400. 4 | 2, 533, 505. 5 | 3, 572, 905. 9 | 42, 620, 080 | 303, 121, 174 |
| 61~ 70 | 1, 120, 855. 2 | 3, 948, 895. 0 | 3, 069, 750. 2 | 11, 530, 940 | 942, 858, 792 |
| 71~ 80 | 1, 989, 667. 8 | 3, 842, 042. 2 | 5, 831, 710. 0 | 9, 429, 140 | 1, 118, 591, 954 |
| 81~ 90 | 3, 118, 763. 3 | 7, 522, 685. 2 | 10, 641, 448. 5 | 12, 101, 650 | 2, 102, 027, 689 |
| 91~1600 | 4, 199, 533. 3 | 9, 723, 139. 3 | 13, 922, 672. 6 | 19, 451, 420 | 2, 707, 626, 528 |
| 計 | | | | 153, 573, 170 | 7, 439, 141, 916 |

を一九三三—一五二〇年、一五二一—四四年、一五四五—一六〇年、一五六一—一八〇年、一五八一—一六〇〇年の五つの時期についてみると、金は第二の時期より八、一一九（単位千マルク）、一五、二二三、一〇、五七四、一二、〇八〇、銀は同じく、五、五二六、四四、三一六、四四、五四〇、六七、四二八となっており、王の「クイント」⁽¹⁰⁾（採掘料で生産額の五分の一を意味するが、時期によってその率は異なる）受取、貢納、科料、免罪符販売及び個人受取を合計してセビリヤに流入した年平均輸入額とその純量は上のごとくになっている（岡本前掲論文四二—頁）。

もちろんこれらの数字は正式な西インド商館の記録に現われた数字で、これ以外に当然密輸のあったのを計算に入れねばならない。これらの老大な金・銀が原住民インディアンの強制賦役的な鉱山労働によって生産されたので、「生産費は殆んど〇にまで切りつめられた」⁽¹²⁾（ボンの語）。

これに対してスペインからの輸出品は、毛織物、絹織物、麻織物などの織物類と金物類であり、とくに毛織物とその製品は重要であった。チリーの山岳地方、アンデス山地、さらにスペイン植民者の常用によって毛織物に対する需要が増大し、スペインの毛

織物工業生産に著るしい刺戟が与えられた。元来スペインはイギリスと並ぶ羊毛生産国であったが、毛織物工業の勃興は、右の金銀輸入と正に期を一にしており、十六世紀二、三〇年代から興隆し始め、この世紀半ばにはその繁栄の頂点に達したといわれる。⁽¹³⁾セビリヤの繁栄も一つはこの毛織物工業の隆昌に負うところが大きい。しかしこの毛織物工業の繁栄を誇張することはさげねばならぬ。セビリヤから輸出される毛織物にはスペイン産原毛を加工した南ネーデルラント及びイギリス産毛織物が含まれていたことに注意せねばならぬ。

さてこのような新大陸貿易による法外な商業利潤は、ほとんどすべてセビリヤ商人に帰する仕組になっていたが、一五二九年カルロス一世（一五一六年——一五五六年）はセビリヤ以外の諸港、コルニャ、ビルバオ、サンセバスチアン、カルタヘナ、マラガ、カデイス等に直接西インドへ貿易船を出すのを勅令をもって許可した。ビスケー湾地方は海賊、地中海岸は地理的不便のため、この勅令は殆んど活用されはしなかったが、最も手痛いのはカデイスへの許可である。カデイスは西インド貿易の開始以来、セビリヤと貿易独占をめぐる抗争し、港としてセビリヤにすぐれていた。^(備2)そこで特権を擁護しようとするセビリヤの勅令撤回運動がフェリーペ二世（一五五六——一五九八年）の一五七三年における撤回によって成功した後も、船舶の大型化に伴い、屈曲多く川底の浅いグワダルキビル河を航行するのが不便であるとして、一五三五年カデイスに「西インド審判所」*Juzgado de Indias* を設立させて、カデイス港からの輸出を認めさせた。これに対してセビリヤの商人は西インド商館に迫って、カデイスからの輸出品を地方物産（ぶどう酒、蠟）に限定しようとし、あるいは西インド貿易に「船団制」が実施された時、カデイスへの割当トン数を制限し、あるいはカデイスからの輸出はすべてセビリヤ・ギルドの「規約」*ordenanzas y leyes* にしたがうことを要求などした。

このカデイスとの商業独占をめぐる抗争は十七世紀六〇年代まで継続されている。すなわち、カデイス港は海

に開いているため強風や海賊に対して安全性が少いというセビリヤの永年の主張を裏付けるかのように、一五八七年（フランス・ドレイク）、九六、一六二五年と三回もカディス港がイギリス人に攻撃されたので、王室に対してセビリヤ商人ギルドは圧迫をかけ、一六六四年には西インド貿易船隊はいかなる場合でもセビリヤに発してセビリヤに戻ることが厳命されたし、二年後の六六年、カディスの上記西インド審判所は閉鎖された。

マラガやジブラルタルに対しても同様にセビリヤの独占に反するとしてそれらの新大陸貿易は王室から許可されなかった。⁽¹⁴⁾

しかし国王の権力の及ぶ国内での独占では充分とはいえない。外国や植民地間の貿易にも対抗せねば商業独占は完璧とはいえず。たとえば、一五八〇〜一六四〇年の間スペインが併合していたポルトガルに対して、セビリヤ商人ギルドは種々手を打ち、一五八九年には国王に対して「テイエラ・フィルメに入った二十一隻のポルトガル船が、商船隊によってもたらされるスペイン商品の市場を破壊している」として、ポルトガル商品の没収とスペインへの強制移送を要請した。またスペイン領アメリカと十六世紀半ば以降開かれたフィリピン群島との、アカプルコ、パナマ、カリヤオ等を拠点とする通称「アカプルコ貿易」に対しては一五八七年の王令によって南アメリカとフィリピンあるいは中国との直接貿易を禁止させた。このアジア貿易の禁止は南米のみでなく、中米にまで及んだ。一五九三年にはフィリピン——メキシコ間の通商は一年に二隻（一隻の積載量三〇〇トン以内）に縮小された。さらにまたブエノス・アイレスを通ずる植民地間の貿易も、一六一八年特権制限、一六五九年港閉鎖によって、セビリヤ商人の独占維持のため停止された。⁽¹⁵⁾

このようなセビリヤ商人ギルドの貿易独占の結果、スペイン領アメリカではヨーロッパ商品の著るしい供給不足が慢性化し、その高価格（実はセビリヤ商人が一五三〇年六月の法命で「思いのままに」定めて差支えないこ

とが保障されていて、単なる自然の需給のアンバランスなどによるものでない）に加えるに、あるいはそれと絡みあって、一五七四年以来取引高税といつてもよい悪名高いアルカバラ税 *alcabara* が新大陸にも課せられ、王室もその財政収入を増大するため、商人の価格釣り上げを支持したのである。この間のいきさつの中に、前期的商業資本の利潤源泉と経済活動の特性、そしてそれが旧来の生産様式や社会関係に寄生してこれを腐朽化させるという傾向が遺憾なく示されている。この点はいずれ項を改めて考察する。ともあれこのヨーロッパ品の高価が、相対的に植民地物産の安価な入手を可能にし、セビリヤ商人がこの西インド貿易によってえた利潤は三〇〇%に上った時があるといわれる。⁽¹⁶⁾

しかしこのような独占に守られた法外な利潤はかえって外国商人の競争を誘発する刺激となるもので、右のフランス・ドレークのような直接掠奪によるスペイン銀船隊の襲撃はともかくとしても、⁽¹⁷⁾カディスやサンルカルあるいはセビリヤ自体で密輸取引を行ったし、またポルトガル、イギリス、フランス、オランダなどの諸外国から直接スペイン領アメリカにヨーロッパ商品を、スペイン商人よりも一層廉価に供給したので、植民地人はもとより、植民地当局からも歓迎されたといふ。⁽¹⁸⁾十七世紀の初頭、ポルトガルの港から毎年二〇〇隻にも上る船で南米向けにヨーロッパ商品が輸出されたが、その商品の大宗をなす毛織物、絹織物がほとんどイギリス、フランス、フランスなどからえられたものであった。⁽¹⁹⁾

以上のような大商人、あるいは商業ブルジョアがセビリヤ、いなスペインの市民を代表する社会層であったことは、もはや喋々を要しないが、一体これに対抗するような小市民層、あるいは産業ブルジョアはどうかであったのか。このためにしばらくスペインの諸工業を通覧しておこう。

新大陸貿易による尨大な金・銀の流入と商業取引の活潑化とは当然スペイン国内の諸工業に活力を与えたと思

われる。けだし金銀は労働力の介在があれば「資本」に転化しうるからである。しかし経済的には勤労意欲をもった労働力の不足と貨幣価値の不安定、政策的には工業軽視と重視（とくに取引高税）などのため、折角芽生えた諸工業も実を結ばず、スペイン自体は新大陸貿易を遂行する上で不可欠な毛織物その他の工業製品を国内で生産しえず、オランダやイギリス産のそれに依存するという結果を招いた。

労働力の点からいえば、まず労働の賤視と非労働日の多さとがある。スペインでは農業労働をも含めて労働は賤民たとえばムーア人（モリスコス）の行うものであったから、一六〇九、一四年のムーア人追放はこの国の農業・工業生産に大きな打撃を与えた。⁽²⁰⁾ 追放数は一五万〜三〇万といわれるが、その他にこうした賤業視される労働は、アメリカへの移民をも促す原因となる。年々一四万の強壯青年層の流出があったといわれる。この点に関連していえば、およそ農業とか工業とか商業といわれるような実業に従事するのは、スペインの上流階級の快しとしないところで、ユダヤ人のごときもスペインでは一四九二年の追放前はスペインの経済を実質的に支える役割を果たしていたのである。^(補3) したがってたとえスペイン人が実業に従事していても「スペインの商人・マニユファクチュア経営者は、金利生活を可能にするためか、もしくは家族に信用基金を設けるためだけ、金をえようとしたり。成功するならば、修道院に入るか、貴族とみなされるように他の地方に転出した」（ジャン・ボードダン）という有様であった。⁽²¹⁾ 「伝統主義」とマックス・ウェーバーが名付けたものの典型的な姿がそこにみられる。⁽²²⁾

次に貨幣価値の不安定は、正にあの金・銀流入が齎した結果であるが、ペリヨン・インフレーションがそれである。もと銀が入っていた銅貨三四マラベディから銀なしの一四〇マラベディ（これがペリヨン貨といわれる）をつくったのはフェリーペ三世（一五九八—一六二一年）であるが、爾後一六二一年までの間四回に亘ってさらにこれを改悪した。そのため一六二五年までには銀貨は流通しなくなった。ついでフェリーペ四世（一六二一—

六五年)の時にはインフレにつぐデフレと通貨政策はめまぐるしく変えられたので、ペリヨン貨は貨幣としての機能を喪失してしまった。一六三三年にはペリヨン貨の変質を噂にするものは極刑に処するという禁令が出された。⁽²³⁾

あれほど大量に流入した新大陸の金・銀もスペインを去ってオランダ・イギリスに流出し、さらに一六三〇年以降新大陸での産出も加速度的に減少したためである。ともあれこうした通貨の不安定が工業活動を含む「経済的進歩の強力な阻止物」たる作用をもつのは見易い道理である。⁽²⁴⁾

諸工業活動に対する一般の軽視は王室政府の政策にも現われている。カルロス二世(一六六五—一七〇〇年)に至って、スペインではじめて工業の保護立法が行われたが、これはフランスの先例にしたがい、工場主・労働者に特権を与え、原料輸入に免税し、アルカバラその他の重税をとりやめたものであり、さらに後には「工場所有は決して貴族の身分を賤しくするものではない」との規定を設けた。⁽²⁵⁾この規定は逆に工業活動に対する貴族、いなスペイン人一般の軽視を何よりも雄弁に物語っている。高級毛織物の生産を禁止したり、アメリカ植民地における工場の設置を許可したり、あるいは主要な労働力の担い手ムーア人(モリスコス)の追放などスペイン諸工業は成長しようにもかたがなかつたといえる。僅かに前述のごとき毛・絹織物工業、陶器、手袋、刃物、鉄工業などが限られた時期を彩ったにすぎぬ。

最後に重税の問題であるが、アルカバラは取引毎に一四%程度であるが、原料より完製品までの十回程の取引で完製品の二四〇%に及ぶということになり、到底正常な取引を育成しえない。ましてセビリヤの商人が王室の経済政策を牛耳っている間は廉価な外国製品の買付けと西インドへの再輸出という方策が大前提となり、自国工業製品は王室の財政収入増加の餌食となっても一向問題にならなかった。

かくて職を失った浮浪者の群は巷に溢れ、既に一五七九年議會（コルテス）への陳情書に「租、税、の、負、担、は、工業を破滅させてしまいました。トレドの労働者達は既に職を失っております。女や娘たちは困窮の余り闇の女となり、男たちは財産を失って妻子を捨て去ってしまいました。乞食の数はかつて無き程増大しております」とあり、また一五九四年にも「人々は毎年一〇〇〇ドゥカドス〔の所得〕のうちから租税として三〇〇ドゥカドスを支払うのであります。これではどうして営みをなしましうか。資本は三年にして蕩尽されてしまうのであります」などの語が読まれる。もちろんこれには陳情におけるいつもの誇張はあるとしても、問題の核心は明白にされている。かくして一六〇八年スペインの浮浪者数は十五万に上ったといい、その後職業的乞食ピカロの数は急速に増大した。いわゆる「悪漢小説」 *novela picaresca* がスペインの黄金時代を形造った背景にはそうした社会経済史的变化があったのである。⁽²⁷⁾

三 商人と貴族との融合と区別

それではセビリヤ商人とは一体どのような社会層であったか。もう少し具体的にこれを追及しよう。そのためには十六世紀のセビリヤに見られた旧貴族の商人化と商人の「新貴族」化の傾向に注目しよう。⁽²⁸⁾

旧貴族は物価騰貴によって旧来の奢侈的生活が維持し難くなり、半面商人の金、銀をキンとする財力に圧倒され、たとえば馬車の華美を競い合うなどはじめると、由緒ある公爵も下級のイダルゴも、海上貿易に投資を行うに至り、その半面貴族社会の閉鎖性の緩和によって、商人が貨幣の力で貴族身分に上昇する風潮が生まれて来た。これは商人と貴族との通婚という手段もあったが、とりわけスペイン王室のカルロス一世、フェリーペ二世時代における戦費調達のための売官制度によって促進された。セビリヤ商人たちも販売されるイダルゴ称号と市参事会

員の資格を法外な価格、例えば七〇〇〇ドゥカドスでも競って入手しようとした。一五九八年四月八日の市参事会の議事録に「イダルゴ身分 *hidalgua* 及び市参事会幹事職 *veinticuatria* を購おうと争う人々は、商人や事業家たちであり、かれらは自分たちの商品の積出しや代理人の活動を容易にするためにそうするのである……これら⁽²⁹⁾の地位を利用してアルモハリファスゴ *almojarifazgo* [関税] の支払を逃れたり、また税関吏に圧力を加えて自分たちの積荷を無検査で通過させるためにほかならない」と述べているのは、社会的威信と経済的実益をねらう「買官」の意味を示しているといえる。十六世紀新大陸貿易に従事した貴族の主要なものが、市参事会員であり、かつ大半がこのような「新貴族」であったことが証明されている。

こうした二つの方向からセビリヤに商業貴族が形成されるに至った。マックス・ウェーバーもいうように、市民の中でも「大商人層」は富裕化するにしたがい土地を購入して貴族の地位に上昇し、商人化した本来の領主的貴族とともに「都市貴族層」*das Patriziat* となり、商人的唯物論にもとづく伝統主義に陥るといふ規定が⁽³⁰⁾こでもよく当てはまる訳である。

この「都市貴族層」をセビリヤの場合、具体的に見てみよう。まず新貴族の船舶所有の実例が一五二〇年代から増大してくる。一五一六年 *Antion Bernal* の “*Santa María de la Merced*” 一五二五年 *Francisco de la Corona* の “*La Magdalena*” 一五三八年 *Francisco Ruiz* の “*Santa María de Guía*” 一五五〇年の *Pedro de Sepúlveda* の “*La Concepcion*” はその著例である。⁽³¹⁾ 因みにこれらの船舶所有者は一五六九年「セビリヤ航海者組合」*Universidad de los Mareantes de Sevilla* を結成している。⁽³²⁾

ところで小貴族の場合には船舶所有のみならず、一般商人と同様に海事金融、信用販売、奴隸、商品貿易に直接従事している。大貴族のように土地財産にその経済的基礎を置いていることがないから、その商人化は徹底して

いた。典型的な例として、プラド家 Pradis とバルレーラ家 Barreras がある。

プラド家は主として海事金融を営み、船舶あるいは積荷を担保とする冒険貸借で、その利子は船舶については八〇〜九〇%、積荷には五〇〜六〇%であった。プラド家のルイスとその甥ゴメスとは一五二五年に西インド向けにセビリヤを出港した商船の二四%に金融している。⁽³³⁾航海によってえられた高利潤の大部分をこの方法で吸い上げるのである。この一族のルイスの兄弟アロンソも亦、商品輸出に携わり、一五一三年小貴族一人、商人一人とともにパートナシップを組み、二〇トネラダ（五六立方フィート強）の商品をイスパニオラへ輸出した。この場合機能資本家は商人であり、貴族は無機能であった。その他商品輸出の傍ら黒人奴隷の売買にも従い、前記ルイスとメルチョルが一五五一年ファン・デ・ビリャグラン（商人）と共同で一、〇〇〇ドゥカドに上る奴隷貿易についてパートナシップを結んだことが知られている。⁽³⁴⁾

次にバルレーラ家では、プラド家にまさる多彩で多方面な活動を営んだ。ファン・デ・ラ・バルレーラ（市参事会員）は一五三〇年代、海事金融の他に信用販売、西インドにおける牧畜（プエルトリコ）、真珠採取（クバグワ）島に投資している。もちろんインディオ奴隷の酷使が行われた。次いで一五四九年からは奴隷船サンタ・カタリナ号を所有し、この年一〇月には男七〇、女五〇人のアフリカ黒人奴隷をベラ・クルス向けに積出した。⁽³⁵⁾

次に今度は商人の「貴族化」の例をみよう。セビリヤでは貨幣財産の集積が他のスペイン諸地方より早く行われたので、この傾向はこの都市に最も顕著に現われた。例えば先ほどの船舶所有者に現われた「新貴族」Antón Bernalの場合をとり上げると、彼はもと金箔製造職人であったが、貨幣を蓄え、一五〇六年頃から海事金融、信用販売にのり出し、自らも商品輸出をはじめた。こうして高利と商業利潤を獲得した彼は一五一二年市参事会員の地位を買収し、古い貴族のファナ・デ・セオスと結婚して新貴族の中に入り、一五一六年にはサンタ・マリア

・デ・メルセー号の持分所有者となり、さらに貧困貴族への消費貸付を行った。⁽³⁶⁾

前出のフランシスコ・デ・ラ・コ罗纳もとくに毛織物類の輸出を中心に大きくなった商人であった。十六世紀半ば「セビリヤで一千マラディの価をもつベルベット一ヤールは、西インドでは二、〇〇〇マラディに価する。それが掛で買われた場合は、その価格は、セビリヤで一、四〇〇マラディ、新世界で二、八〇〇マラディとなった」というのであるから織物類の信用販売はとくに有利であった。⁽³⁷⁾ なおこの「貴族化」に関連して「宣告上の貴族」hidalgo de ejecutoria というのがある。これは商人としてしか取扱われない者が、法廷に貴族身分確認の訴訟を起こし、貴族の血統を立証した時、そう呼ばれるのであって、前述アロンソ・デ・メダイナや鉄製品専門商人で新貴族となったロベ・フェルナンデス・デ・エイベルなどはその著例である。⁽³⁸⁾

四 スペイン都市貴族層と文化一般との関連について

さて以上のセビリヤ「都市貴族」が政治、文学、宗教、美術などどのような関係にあったかを最後に見よう。政治、とくに王室とセビリヤ都市貴族との結びつき、その王室政策の強力な指導については既に何度も、ふれて来たが、これを象徴するのが、一五二二、二五年の西インド商船の護衛艦隊建造契約である。これは一五二六年、セビリヤ商人六七名と他一二名の費用で建造艤装され、約二〇年間セント・ベルデ岬島付近でスペイン商船隊を送迎した。一五六一年からこれは永久的な制度となり、これがいわゆるスペイン無敵艦隊 Armada の基礎となった。この護衛艦隊の経費支弁のため王室はアベリア（西インド貿易輸出入税）を設けたが、商人側はこれら自らの支配下に置いた。また輸出入商品報告書表に対する西インド商館の検閲に対してもセビリヤの商人ギルドは緩和を要求し、関税のごまかしを可能にしたといわれる。⁽³⁹⁾

このようにセビリヤの商人は西インド商館官吏はもちろん、王そのものさえ彼等の商業活動の、いわば道具と化し、スペイン専制支配の真実の担い手としての役割を果たしていたといえる。したがってこの頃のスペインの政治的支配、行政的活動の主体こそ、セビリヤ商人あるいはその「都市貴族」であつたといえる。十七世紀末カディスが擡頭するまでこのセビリヤの地位は不変であつた。

次に文学でいえば、無敵艦隊の補給係だつたといわれるセルバンテスのドン・キホーテには、当時の労働輕視、モリスコ蔑視を次のように述べている。「このムーア人というかす。あいつらの関心事はただもうお金を鑄造すること、鑄造したお金をためること、したがってそのために汗水たらして、働いてしかも殆んど食うものも食わない——こうしてしよっちゅう稼いで決して浪費しないものだから、しまいにはスペイン中のお金の殆んど全部が集つて山のようになる。……やつらはすべてを集めすべてを貯め、すべてを貪り食う。しかもやつらは大勢で、すぐに結婚し、いくらでも殖える⁽⁴⁰⁾」とあるが、イダルゴたるドン・キホーテをオランダの經濟的生産力の象徴たる風車と闘わしめるセルバンテスの真意は、むしろモリスコがスペイン經濟の基底としてその生産力を支え、スペイン經濟生活の眞の支柱であることを裏に物語ろうとしている語と聞いてよいだろう。

悪漢小説の代表的作家達もやはり時代の眞の性格をよく見抜いており、例えばマ・テオアレマンもその「グスマン・デ・アルファラチェ」の中で、「尊敬されるのは君の知るところではなくて君の持てるものであり、君の德行ではなくて君の財布であり、さらに実際には君の財布ではなくて君の費すところである⁽⁴¹⁾」⁽⁴¹⁾といつて当時の商人の經濟活動の浪費的目標をついている。

詩についていえば、既に前に引用したルイス・デ・アラルコンの詩の他に、偉大な詩人ロペ・デ・ベガも「お金はまさに万能で、王子であり、郷土であり、騎士でありけだかい血筋であり、名門の末裔であることをお前は

疑われない⁽⁴²⁾」といって、商人の貴族化、新貴族の身分を鋭く示している。

一五五〇—一六八〇年頃の黄金時代のいわゆる「悪漢小説」がどのような背景をもったかは既に前に考察した。最後にスペインが対抗宗教改革の総本山であったことにふれよう。その徴候は既に一五四〇年イエズス会を公認した宗教政策に現われているが、さらに十七世紀に入って一六二一、二五年カステイリヤの議会（コルテス）が聖母受胎 *Concepcion* の秘跡をカトリック教義とする悲願を表明し、その誓いを強制するに至った時にはっきりと示されている。⁽⁴³⁾ これによってスペインの対抗宗教改革は強力に押進められた。

こうしたイエズス会の宗教的活動と絡みあつて建築、その他にいわゆるバロック芸術の華が咲き出たのである。「バロックがある種のカトリック文明の表現であつた」とか、あるいはイエズス会の教会がバロック様式を採用した事実、「十七世紀のヨーロッパにおいて、バロック的建築および装飾への好み、豪華の誇示、または更に装飾過剰や多彩な表現への趣味をはっきり示した国々というのは、農民的要素と貴族的要素とが支配的であり、ブルジョワジーの勢力ははるかにかぎられていたように見える国であつた」という事実は⁽⁴⁴⁾それを暗示するが、さらに、かの『無垢受胎』を作つた彫刻家ファン・デ・マルティネス・モンターニェス（一五六八—一六四九年）が、作つた「悲しみの聖母」は今なおカステイリヤやセビリヤの民衆に真実で正しい宗教的感情を湧き立たせているし、エル・グレコの作品も宗教的・神秘的・領主的な十六世紀のスペインと不可分に結びついており、セビリヤで製作をしていたスルバラン（一五九八—一六六四年）は写実的表現の中から神秘的な意味を引き出す点でバロック的とみなされている。グレコ、ベラスケス、ムリリョなどの宮廷画家がすぐれた作品を残したのも、こうしたスペインの富と貴族的要素との間に生まれた歴史的成果であつた。なお最後にこのスペインのバロックが海をこえて植民帝国に伝わつたことも付記しておかねばなるまい。⁽⁴⁵⁾

ともあれ、スペインの文化一般はその当時のスペインの経済生活、とりわけスペインにおける市民—大商人の「都市貴族」化の中に色こく染め上げられているのであって、その経済生活が生産的基礎を欠いており、また社会的関係がその発展を強く押し止めていたからこそ、スペインは新興のオランダやイギリスの生産力の前に破れ去らねばならなかった。十六世紀末、あの無敵艦隊の英・蘭連合軍による撃破（一五八八年）は正にそのような勢力交替の明白な歴史的表現であったといえる。スペインでは商業ブルジョアの意味においても「市民層」の真実の形成を語りえないと結論してよいであろう。こうした文化一般が経済生活に及ぼした反作用を知ろうとするならば、われわれはフェリーペ四世の時代にカトリック信仰が民衆の日常生活の隅々まで働きかけ「ある教区教会における宗教的祝日は一年の日数の三分の一にも及んだ」という事実を一例にあげることができる。これが民衆の勤労の精神や実業、とくに農、工業生産労働にいかなる影響を及ぼすかはもはや明白であって、そこに生まれるものは勤労の停止、怠惰、非生産的浪費への傾向である。働くことへの蔑視は、禁欲と日常生活におけるピューリタンの職業重視のイギリス、オランダ的労働生活と正に対蹠的であった。

註

(1) 「市民階級」とその社会—経済史的諸規定に関しては、拙稿「市民階級」(ヨーロッパ近世文化研究会報告一九六七年度所収)を見よ。

(2) 前掲報告所収、西垣雄太郎「フェリーペ四世時代のスペインの生活」(1)、四九頁。

(3) たとえば岩波『西洋経済史講座』や有斐閣『社会経済史大系』など、わが国経済史学界の標準的な企画の中にも歴然とこの立後れの証拠が現われている。一つは日本の「近代化」の目標としてのモデルが英・仏・独などのヨーロッパ諸国に限定されたという事情もあろう。

(4) 宗教については Monumenta Historica Societatis Jesus. vol. 67-68. Epistolae S. Francisci Xaverii aique scripta. Georgius Schurhammer S. J. et Josephus Wicki S. J. Romae 1945 (アルミール神父、井上郁二邦訳『聖フランシスコ

デ・サビエル書翰抄』上・下、岩波文庫)、経済に関しては異国叢書中の『ドン・ロドリゴ日本見聞録、ビスカイノ金銀島探険報告』村上直次郎訳が参照されるべきである。

(5) セビリヤは、当時カステイリヤで「最も富裕にしてかつ人口稠密な都市」であり、新大陸、西インド貿易の唯一の出口であった(木田和男「セビリヤ商人ギルドの貿易独占」関大商学論集三卷三号、八二頁註(1)——以下木田「独占」と略す)。

(6) 増田義郎『太陽の帝国インカ』角川新書七―八頁。

(7) 木田和男「西印度商船とセビリヤ貴族」堀江保蔵編『海事経済史研究』所収)一八〇―八一頁以下(—木田「貴族」と略す)。

(8) 大塚久雄『近代欧洲経済史序説』上の一、二二頁以下。

(9) 木田「独占」七二―七四頁

(10) 岡本前掲論文四〇二頁以下

(11) スペインの貨幣単位はドウカドは三七五マラベディ、一ペソは四五〇マラベディ(maravedis)、これが貨幣の基本単位。一トミンは八分の一ペソ、一グラノは十二分の一トミンである。ゆえに一ペソは六分の五ドウカド、四五〇マラベディ、八トミン、九六グラノに相当する(木田「貴族」一九三頁注)

(12) 大塚前掲書三三頁

(13) 同上三八―四一頁

(14) 木田「独占」七六頁

(15) 同上七八頁

(16) 同上七九頁

(17) これについては拙著『イギリス東インド会社史論』

(18) 木田「独占」八〇頁

(19) 同上頁

(20) 天川潤次郎「スペイン帝国衰退の経済的原因」(関学大経済論究十二卷四号)七九、九三、九五頁、さらに井上後掲二五九頁には一五七三年のトレードの外国労働者が描かれている。

- (21) 井上幸治編『南欧史』二五九頁
- (22) Traditionalismus *deutsches* Weber, M., Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, 1904~5.
(阿部行蔵訳)を見よ。そしてこれがいかに近代的な合理主義的資本主義の発達に阻害的要因となるかを想え。
- (23) 天川八〇頁
- (24) 以上天川「衰退」八〇―八一頁
- (25) 天川八二頁
- (26) 大塚前掲上の一、七〇頁
- (27) 木田「独占」四頁註(43)
- (28) 「旧貴族」と「新貴族」との区別については西垣前掲論文五三頁の「旧キリスト教徒」「新キリスト教徒」という宗教的表現と対比せよ。
- (29) 木田「貴族」一七八頁及び一八一頁註(13)・(14)参照
- (30) 前掲拙稿「市民階級」二七―八頁。
- (31) 木田「貴族」一八四―五頁
- (32) 同上 一八二頁
- (33) 同上 一九二―三頁にルイスとゴメスの海事金融(一五二五年)の詳細な表があり、金融額、日付、担保、借主、船客、行先が明記されている。
- (34) 同上 一九四頁
- (35) 同上 一九四―五頁
- (36) 同上 一九八―九頁
- (37) 同上 一九九―二〇〇頁
- (38) 同上 一九九―二〇〇頁
- (39) 木田「独占」八六―七頁
- (40) 天川前掲 九七頁

スペインの市民階級

- (41) 木田「貴族」一七七頁
- (42) 同上 一八〇頁
- (43) 西垣前掲五五頁
- (44) 高階、坂本訳タピエ「バロック芸術」一六、四六、五五頁
- (45) 同書九九頁―一七頁
- (46) 西垣前掲論文五四頁
- (補1) 「西インド商館」の構成と仕事については岡本博之「スペイン領アメリカの金銀」(『世界産業発達史研究』所収)四一七―一八頁を見よ
- (補2) とくにカラベル船(一〇〇トン内外)が一六世紀半ば頃ガレオン船にとって代られたため船が大型化した(木田「貴族」一八九頁)
- (補3) スペインにおけるユダヤ人(marrano(豚)とよばれていた)は実業はもちろん、司法、行政、軍隊、大学などあらゆる面で社会的に進出したが、一四七三―七四年の虐殺、一四八〇年以降の宗教裁判を経て、一四九二年三月三十日スペイン領土から追放の令を受けた。十五万をこえるユダヤ人が追放され、ポルトガル、トルコ、アフリカにのがれまたその避難民はより多数であった。トルコでは、地中海東部の国際貿易を掌握し、またトレードやセゴビアの手工熟練・商売上のこつを伝えた(シーセルロス長谷川安禎訳ユダヤ人の歴史一五八―六八、一八二頁など)

(補4) スペインの貴族では

| | | |
|--------------|---|--------------------|
| 大公 grande | 公 | 三〇〇〇〇〇〇～五五〇〇〇〇ドゥカド |
| 有爵者 titulo | 候 | 三〇〇〇〇〇〇～六〇〇〇〇〇 |
| 騎士 caballero | 伯 | 一〇〇〇〇〇〇 |
| 郷士 hidalgo | | 〃 |